

時間作品, 時間価値, 時間享受 (Ⅱ)

武井勇四郎

序

第1章 運搬される時間情景

第1節 モノ的時間

- (イ) 冬眠する時間
- (ロ) 時間潰し
- (ハ) 絵巻の時間 (以上, 前号)

第2節 コト的時間

- (イ) 仕事
- (ロ) お喋り事 (以上, 本号)
- (ハ) 考え事

第1章 運搬される時間情景 (つづき)

第2節 コト的時間

(イ) 仕事

これまで述べて来た冬眠する時間, 時間潰し, 絵巻の時間に共通する点は, 時間のモノ性にあり, そのモノ性は乗客のとりそれぞれの振舞い方に十分な表現を見出している。前方にいやな者がいるか, いやな長い物が横たわっているか, それとも所与の空間的延長の風物の線型的流過であるかは, 乗客のとりそれぞれの構え次第であるが, いずれにおいても前方が立ち塞まっているか, 堅い充実物として詰っているかを特徴としている。ここには乗客が主体的に行く手に立ち向って手前から橋桁を立て前方へ橋を延ばして向岸へ渡るといふ未来の

あきまがない。あるいは水が堰を切って涸れた河に流れだし、どンドン下に流れるとか、あるいは温度計の水銀が温度上昇に伴ってうなぎ上りに天辺まで昇りつめるとかのイメージが持てない。別言すれば自動詞的行為によって充填される空間か、可塑的な空間かが前途にない。動きのとれない空間しかないのである。

仕事にあっては前方がぎっしり詰っている有様のイメージは通用しそうもない。あらかじめ物が詰っていて何もかも規定され確定されているのなら、残すは破壊の行為しかないだろう。自由な創造の行為や振舞いの余地はすべて閉ざされ一歩も前に進めないであろう。今や、問題となる乗客の振舞いはZ駅まで我がものに出来る余地を自らの行為で埋め込んで行くことである。すべてが規定されてはいない間隙を補充し、未知数一つ一つに解を出して行く作業が問題なのである。

Z駅までこの汽車を運転する運転手がいることは失念出来ない。彼とても乗客ではないが、汽車によって運ばれていることには変りはない。彼にとっても運転する機関車にとっても、Z駅まではまだ充たされていない走行すべき空間である。ここでは比喩は不要で事通りに現象を記述するのが事柄の本質に一番かなっている。この空間は全くの空虚で全くの未規定ではなく、既に地上にはレールが敷かれ、上には架線がかかり、信号系が随所に立ち、踏切りがあり、空気がある。何よりも客車を牽引する機関車が軌道上にある。機関車が前方へかなりのスピードで進めるのは電動機の動力によるが、前途にこれと言った抵抗物や障害物が立ちだかっていることにもよる。運転手は自分の手足の力で客車を牽引するわけではないが、それを牽引する機関車の先頭立って汽車全体を目的地に向けてその走行を規制操作することになる。A駅の発車からZ駅の終着まで、関係の器機を操作して汽車を時刻通りに運転すること——これが彼の仕事である。もし何もかも自動制御されていて無人操作で汽車が動くなら、A駅からZ駅まで多数の乗客を運ぶ仕事は、機関車と駅の中央制御室の人々であろう。しかし、運転手が乗り込んでいる以上、何事かの為すべき事が

残されていて、万事が確定済みでなく完全に自動制御されていないはずである。手動による発車と停車，スピードの調整，信号の確認，定刻通りの通過，偶発的事故に対する適切な判断等々の運転手の身体諸器官の活動は残されている。これらが彼の仕事となる。彼の分身とも言える機関車の働きを果させるためには彼は知覚し，認知し，判断し，手足で器機を操作する。機関車の方も恰も彼の身代りとして客車を牽引して行くほどのものに受肉されていなければならない。機関車と運転手とは一心同体の存在であり，機関車は彼の手足のように自由自在に操作されるものでなければならない。彼は機関車から離れた第三者の傍観者ではあり得なく，彼自身が自ら運転する機関車に乗せられながら，自らそれを運転する運転手である。人が自分の足で歩いて全身を前方に運ぶのと同じである。機関車には彼の血が流れ，神経がつながり，息が吹きこまれ，受肉され，自分の身体諸器官を無意識的に操るように機関車を思う通りに操ってはいなくてはならない。汽車が前方に進むことは彼自身が前方に進むことと同じである。しかし進む操作をするのは彼であるから持ちつ持たれつの受肉した道具と人間との関係にある。

軌道上のZ駅までの運転方式は自転車などのそれと違って大方決ってはいても走行の細部においては未決定である。その未決定部分を既知化して行くのがその都度その場に臨む彼である。彼はその都度強い因果関係が働いているその場その場に臨んでいてこそ操作を果すことが出来る。その日の状況，条件次第で未決定部分の地平はその変域を変える。その変域内で常数を見つけ出して行くのが彼の運転作業なのである。彼の仕事が創造的か反復的かは当面の問題ではない。また労働の軽重も問題ではないし，その仕事の単調さや複雑さも問題外である。問題なのは常にその都度の現在の時相から見て，大方において前途が予知予告されていて，未来のすべてがことごとく既知数として埋めこまれていず，解決すべき事柄が多く残っているということである。厳格な機械的決定論はここでは通用しない。その都度の場に働く強い因果作用は沿線全体に同じ射程を持っていないし，同じ程度の作用で働いてもいない。A駅発車まもな

い処で働く因果作用は必ずしも2時間後の処にまで作用を及ぼすほどのものではないから、発車まもない因果で2時間後の走行を厳格に決定すべくもない。ある時点で事故が起って途中多少の遅れはあってもZ駅の終着まで及ぶわけでもない。もし修復不可能な事故であればその後の運行は不可能なので、残りの時間は消えたも同然となり、彼の運転手としての任務は終了してしまう。従ってZ駅までの運行操作に影響を及ぼしていることにはならない。もし発車直後の因果がZ駅までの運行に常に強く働いて運行のすべてを確定規定するなら、何も運転手は必要なかろう。既に走行した分は既知化され確定化され充填されるが、これから走る前途は空白だらけで定まっていない。その都度の現在の中で働いてくる因果関係の中で来たる未来を決定してゆくのであって、この未来は純粹可能性(純論理的可能性)ではなくて、経験可能性なのである。例えば1時間後にもこの機関車が正常運転出来るかどうかは、機関車内の条件と機関車外の条件如何にかかっている。その間運転手が居眠りもせず、電気系統も正常であり、架線も切れず、踏切りで自動車も立往生もせず、子供もレールの上に石などをおかない等々の事が充たされた場合である。機関車内の条件がいくら充たされても、運転手は運行を妨害するすべての出来事の発生を未然に防ぐことは出来ない。むしろ偶然的な出来事、予測も出来ない事件が軌道上、沿線の上にのびるのである。沿線に交叉し交錯するこの偶然的な出来事は、汽車の運行にとって偶然的であって、その出来事はそれとしてはまたその出来事の中で必然性を持っているものもある。このような必然性と偶然性の交叉の中にあるのが未来である。この未来も大未来ではなく、その都度の現在の運行にとっての未来、言うなれば軌道上の未来とでも言える小未来である。運転手は軌道上の未来のいくつかの空白を運転しながら埋めて行くのである。ここで軌道上に交叉する偶然性と因果関係について深入りすることは差し控えよう。この問題に触れる時がいずれ来るのでその時に詳述したい。むしろここで機関車内の条件に限って、運転手の仕事の時間と汽車の運行時間との関係に止目したい。

一般に運転手が乗客と見做されないのにはそれなりの理由があるはずである。彼の仕事の時間は、乗客を運ぶ運転の時間のことで、両者は同体的で、互いにくずれることも遊離することも出来ない不即不離の関係にある。乗客の自分の時間は乗車時間と同体的ではあっても運転時間と同体的ではない。何故ならば乗客は運転する仕事はしていないからである、つまり運ばれることはあっても運ぶことはしないからである。運ばれる間、居眠りしたり、読書したり、お喋りしたりするのは乗客の自由である。しかし運転手にとって窓外の景色に一時見惚れたり、一時的に居眠りしたり、場合によっては雑誌を読んだりすることが全く遮断されているわけではない。それは彼が自ら運転する半ば自動的に動く機関車によって運ばれていて、運ぶ操作をする身体と運ばれる身体が同一であることによる。例えば、人が歩きながら本を読むかヘッドフォンで音楽を聴くのと同じである。しかし、運ぶ操作活動をする身体と運ばれる身体が同一の身体であっても階梯構造や入れ子構造が、その同一本人においてくずれたり解消したりするわけではない。例えば歩きながら本を読んでいて溝に落ちたり、マイカーの運転者がよそ見したり居眠りをしたりして大きな致死事故を起すのは、運ぶものと運ばれるものとの層構造そのものが壊れたり入り乱れたりするからではなく、運ばれる系が運ぶ系よりも強勢を示し、前者を隠蔽することから来る。後者が前者を完全に領することからくる。むしろ入り乱れる場合は身体諸器官上の機能障害を起した時であって、正常の場合では層構造は壊れない。事故を起すのは層構造が正常の証拠であることを示している。それぞれの系はかなりの独自性と自由性を持つが、下層は上層に対して基づける権利を放棄しているわけではない。運転手の場合だと、運ぶものが常に優位を保つようにし、運ばれるものが擡頭してもそれに支配権を与えないよう規制を働かしているのである。支配権を与えてしまえば下層は完全に蔽い隠され下層（運ぶもの）の系の上層（運ばれるもの）の系への規制が働きにくくなるか、その働きが抑制されてしまう。運転手がリラックス出来なくて疲労を覚えるのはこの運ぶ仕事が強い緊張度をもって、ときたま出現してくる上層の自由な振舞いに規

制を加えているからである。汽車が危険な状態におかれるのは、運ばれる運転手の自分の時間が浮び上って優位を示し、運ぶ時間を完全に蔽いつくす時だ。注意すべきは乗客にだけ階梯構造があって運転手にはないとするのは当らない。運ぶ時間の主体と運ばれる時間の主体とが同一であるか否かによって、下層と上層の遊離性や乖離性が決ってくるので、乗客にあっては機関車を運転する運ぶ時間の主体でないから、勝手に居眠りしたり、雑誌を読んだり、将棋を指したりなど出来るのである。〈ながら族〉にあっては基づけるもの（運ぶもの）と基づけられるもの（運ばれるもの）の主体は共に同一主体（身体）であるので、遊離性の度合、下層の上層への規制の度合、上層の下層への隠蔽の厚みは多種多様であって、それぞれの場合によって異なってくる。例えば、自動車運転しながらラジオを聴くのと、窓外の風景を見るのと、乗客とお喋りするのと、それらいくつかを兼ね合わせるのでは色々と異なってくる。上層の運ばれる時間の統一性をつくるものは意識の何んの働きか、統一性が出てくると必ず、下層を完全に隠蔽することになるのか、運ばれる時間の構造に律動性があるところに意識が吸い込まれれば、どうして下層の規制が働きにくくなるのか、といったいくつかの問題は単に心理学的問題や生理学的問題につきない一つの時間の構造の問題でもある。ここではこの問題に深入りするの時期尚早である。

喚起を促したいのは、運転手の運ぶ仕事が極めて現実的で地についているということである。恰も汽車が地上を走るそのように現実の地にぴったりくっついてることなのである。それは親が幼児をおんぶして歩いているのと似ている。幼児は背負われる気易さで眠ることが出来るが、親は出来ない。運ばれる時間の方は背負われているだけあって、運ぶ時間よりも軽く気楽なのであるが、運ぶ時間は背に自分以上の重みを感じ、責務を負う。運転手の時間はいわば地に足をつけて乗客を背負うような時間であるから、運転手は自ら運転する汽車で運ばれていても乗客とはなり得ないのである。運転手の仕事は奉仕の機能を持っているのである。次に運ぶ仕事の時間ではなく、運ばれる仕事の時

間に、つまり乗客の仕事の時間に止目して、仕事の時間のコト性を詮議したい。

よく車中で見受けられる婦人の手芸は興味深い。編手は花瓶に敷くレース編みに精を出している。彼女は乗車の3時間を無駄にしないため編みかけの仕事を持ちこみ、出来たら下車までに仕上げる心づもりでいる。彼女の振舞いには一つの成し遂げる目的が貫ぬいていて他のことに手出しをしない。これまでの編物の花模様はまだ半製品で出来上るべき全体の半分にすぎなく、残り半ばは頭の中に図案こそあれ、まだ出来ていない空白部分である。彼女の残る仕事はこの残り部分を編み上げることである。素材としての玉巻きの糸、レース編み用のカギ針——これは物であって編むことそのことではない。編むことは編手の身体的行為、特に手の動きにあるが、手を何かに則って動かしていかなくてはレースは少しも編み出されない。その何かはカギ針でも糸でもない。頭の中に描かれている図案だけでもない。手の動きに糸とカギ針が共に絡め取られるが、今編む編手の手の動きの時相はこれまで編まれた部分とこれから編まれる空白部分との接点にある。今編むことはこれまでの編物に支えられてしか前方に編み出せないし、空白部分の図案から離れても編みを進められない。編手の手には過去の充実部分と未来の空白部分の両方が収束している。未来といえども全くの空虚な時相ではなく、心中に想い描かれている図案が志向的に樹立されていて、これが現在時相を通して既に充実した編物の図柄に半ば融け込んで体化している。充実した図柄は一つの仕上るべき花模様の片割れで残りの半分は単なる志向的図案でしかない。カギ針は生き物のように図案に則して糸を絡め取り、絡め取られた糸はもはや糸ではなくレースの織り糸となっている。糸は先行の織り糸に錯綜して絡みつき、後続の糸によって絡みつかれその線条性を失い、脈絡をもつ模様として構造化される。構造化された糸の総体が花模様の敷物である。糸自らが植物のつるのように絡むわけでないから、それをそりなさしめるのは編手の手の絡め取りの動き、つまり手さばきである。カギ針は指先の延長体として生動化していて、糸を絡め取って先行の糸に絡めるので

ある。どのような模様が出来上るかを確認しているのは彼女の眼であり、それを確証するのは編手の手であるが、彼女の眼は常に心中の図案と出来た図柄の両方を見比べて全体的に統制し、統轄していなければならない。勿論、手の動きをも監視している。指先は眼と分離して勝手な振舞いをする事は許されない。また編み終るまで図案は心中に把持されていなければならない。極めて複雑な図案であれば、あらかじめ紙面にその図を定着しておく。この場合だと眼は設計図と図柄との統轄者として働く。指先には彼女の心身のエネルギーが集まり、それがカギ針を通じて編物全体に拡散し、完成されるまで蓄積される。それはレース全体として体化する。体化は構造的組織化的体化である。それが作品というものであり、脈絡のある有形の構造物であって、単なる糸でも、単なるカギ針でも、単なる図案でも、単なる手の動きでもない、組織化した総体である。

編手の乗車中の仕事は完成品としての敷物ではなく、構造的に編まれて行く編物、つまり進行形の編物であり、前方に伸延し、放射状に膨張する展開を創り出す業である。現在の時相は過去時相と未来時相とをともに掌中に収めている。過去時相が現在時相を支え基礎づけ、未来時相が現在時相に手を差し延べそれを招き寄せる。そのことによって現在時相は過去時相に転じる。そして過去時相は跡形もなく流れ去って消えるわけではなく現在時相に絡みついでいて、後から現在時相を支えている。既に編み出された花模様は現在の手の動きを実的なものとして規定し規制する。そのことによって空白部分は編物の刻々の膨張によって徐々に埋めこまれ、図案は図柄として現実化される。志向的対象性でしかなかった図案は、糸の構造化によって肉化され、外的知覚対象物としての図柄となる。実的对象物となる。この実在化が編手の業、つまり仕事である。未来の志向的図案は、出来上るべき実在化さるべき敷物を最後の最後まで志向的に規制し、全体的輪郭からの手の動きの逸脱をくいとめる。現在時相は過去時相と未来時相との引き合い寄り合う^{はざま}迫間の中で展じられるそれで、幾何学的な一点、つまり一瞬ではない。両時相の掣肘を絶えず受けている梁間の

時相である。

レース編物が敷物として出来上ってしまえば、編物の伸延膨張は終り、完了形の姿となる。とりも直さず一つの構造化された対象物が仕上る。それはもはや空白部分の喪失であり、出来上った輪郭の外の空白は編まるべきものの空白ではない。編手の活動もそれと同時に停止する。糸の構造化は終り、終った時点で糸は編物から絶ち切れ、カギ針も手からも編物からも離れる。糸、カギ針、手の有機的三項関係は解体しバラバラとなってしまう。別言すれば、それこそ最後の一瞬の手の動きによって志向的図案はすべて図柄に転じ、未来はなくなり、それと同時に編物は一ふくらみしてその膨張を終るのである。ここにあるのは三つの時相の展相性は消滅し、編むことの時間は終熄する。仕事はすべて一作品と化したのであり、この作品は同時的な空間的延長体を示すことはあれ、もはや表立った時間の推移の表情は示さないのである。物なのである。この敷物は何時間かかって編まれたかの表情は寸毫も示さない、示すものは一つの花柄の模様のみである。

レース編の敷物を作った人は、最も古典的な意味で、仕事をしたと言われる。古典的というのは素材としての糸から一枚の敷物が出来たということ、つまり一つの視覚的事物糸からもう一つの別の視覚的事物敷物が生じたということである。敷物は出来上ってしまえば一つの物であってこれを仕事と言わないのが普通であるが、しかし、しばしば完成品や出来上った物をもって仕事と同一視されることがある。それは心身のエネルギーが敷物の中に蓄積、沈澱している点に注目してのことである。一連の編手の行為、営為が敷物として結実し、つまり眼に見えるような形象をもった物に結晶しているからである、別言すれば作品に体化しているからである。

と言って、仕事を空間的物扱いすることは推移や過程を無視する点で大きな誤りを犯すことになる。敷物は完成してしまえば、時の表情を示さないが、このことによってこの敷物が人の一瞬の努力によって成ったことを示されるわけではない。一瞬の努力や実践で何事も仕上るものではない。物が出来上るには

時間がかかるのである。時間がなければ物は出来上らないのである。時間のかかった努力こそが仕事の本質であろう。しかし、止まれ。時間がかかるものならずすべてが仕事かと言うとそうではなく、例えば、自然現象において木が、種子から成長して大木になっても仕事をしたとは言わない。そこには人の生業がないからである。また物の破壊も仕事とはあまり言わないのは、そこに技がないからである。

おおかたの国語辞典によると日本語の「仕事」の「仕」は動詞「為す」の連用形「シ」の当字とされる。また「仕事」は「為事」とも書かれるとされる。するとこの意は〈事^{ワザ}を為す〉の意にとれよう。今度は漢和辞典で「事」を調べると人のしわざ、行為、仕事、職業とあり、さらに「事」の字源を調べると職業を表わす家の前に立てた幟とある。こうみると「事」は一般的に言って人の所為、営為である。今度は国語辞典で「こと」を調べるとほぼ漢和辞典の積くところと同じで〈仕事〉と記されている。この「事」をワザと解釈するのは本居宣長であることは周知のことである。後に再度検討するので彼が『うひ山ぶみ』で述べている箇所を引用しておこう。

「……まず大かた人は、言^{コトバ}と事^{ワザ}と心^{ココロ}と、そのさま大抵相かなひて、似たる物にて、たとへば心のかしこき人は、いう言のさまも、なす事^{ワザ}のさまも、それに応じてかしく、心のつたなき人は、いふ言のさまも、なすわざのさまも、それに応じてつたなきもの也、又男は、思ふ心も、いふ言も、なす事も、男のさまあり、女は、おもふ心も、いふ言も、なす事^{ワザ}も、女のさまあり、されば時代々々の差別も、又これらのごとくにて、心も言も事も、上代の人は、上代のさま、中古の人は、中古のさま、後世の人は、後世のさま有て、おのおのそのいへる言となせる事と、思へる心と、相かなひて似たる物なるを、今の世に在て、その上代の人の、言をも事をも心をも、考へしらんとするに、そのいへりし言は、歌に伝はり、なせりし事は、史に伝はれるを、その史も、言を以て記したれば、言の外ならず、心のさまも、又歌にて知ルべし、言と事と心とは其さま相かなへるものなれば、後世にして、古の人の、思へ

る心，なせる^{ワザ}事をしりて，その世の有りさまを，まさしくしるべきことは，古言古歌にある也，……」（本居宣長『うひ山ぶみ』日本思想大系40，岩波書店）

「言」と「事」の同異については後に論ずるとして，ここでは「事」を人のワザの意にとっておく。日本語の「ナス」は「為す」「成す」「生す」に通じているので，「仕事」は〈あるワザをしとげる，あるワザを成就する，あるワザを生みだす〉としても大過はあるまい。すると「仕事を成す」「仕事をする」という言い廻しは「仕」と「成す」や「する」と重なってどうも同語反復的響きは免れない。しかし，「仕事が終わったので家に帰ります。」のような言葉遣いがあるから，「仕事」は一つの行為過程の抽象名詞的表現（体言）としてもうけとれる。しかし，「机」と言ったような事物名詞的表現の意は薄く，動詞的事象（用言）のイメージが強い。この点で，例えば動詞「歩く」の動名詞的表現として「歩くコト」（＝歩行）とするのも故なしとしない。そしてほとんどの国の言葉において動詞に過去形，現在形，未来形の時制があることを考え合せておくべきであろう。「物有_二本末_一，事有_二終始_一」（大学）とあるから，「物」は空間性で，「事」は時間性で把握されていることが分る。こうみると「事」はある時点の始まりとある時点の終りのある梁間ないしは推移過程が把まれている。

婦人が敷物のレースを編み出し花模様の柄の敷物として編み終るまでのそれに当てられている時間の梁間は，彼女の仕業，つまり^{ワザ}事であり且つ^{ワザ}技である。手芸は手のワザなのであり，出来上った敷物はその結実としての仕事，つまりワザをしとげた成果なのである。時間が過程的〈事象〉であるのは，推移的なワザの象^{カタチ}を示しているからである。婦人が編物をしている形姿こそワザの形であるが，それは一瞬ではなくある梁間のある推移的な形である，別言すれば推移的な現象，推移的な面貌である。彼女は居眠りしている姿をとっていないし，週刊誌を読む姿をとってもいないし，窓外の風物の流過を眺めている姿をもとっていない，まさしく手でカギ針を操って糸を絡め続けている姿をとっている。その様はワザを続ける様なのである。これが時の一つの面貌である。

しかしこの古典的な仕業にあって、推移する事^{ワザ}の象^{カタチ}が、一つの花柄の敷物という物^{カタチ}の象に体现されていることを見逃してはならない。手芸は手芸品に表現されるのである。別言すれば、手芸品は体化した、硬直した時間、沈澱し、結晶した同時性の時間とも言える。

世の人はこの体化し硬直した時間に往々にして注意を奪われ、推移的事象、動的過程を看過して、作品、製品、完成した仕事を前面に出し高い評価を与えるくせがある。事よりも物を大事にするという悪弊に近い最層がある。物の形をとる仕事が仕事であるという偏見である。

日本語には以下のような表現があるので興味を惹く。「事務員」(「事務屋」「事務長」)、「理事」(「理事長」)、「検事」(「検事総長」)、「人事」(「人事課長」)、「執事」(社寺で事務をとりしきる人)、「知事」(「県知事」)、「商事社員」などの職業、役柄、職務を示す語がある。この人達の仕事ははっきりした物的形象をとるのか。

ある多忙な商社員が乗車しているとしよう。彼はZ駅の近くのある会場で下車後ただちに大きな取引をすることになっていて、この乗車の3時間をその下準備に当てるつもりで一連の書類を鞆に入れて乗り込んでいる。この下準備の出来具合は取引に影響を及ぼすものなので3時間内に終了していなければならない。細部の資料の整理、本社との電話による最終的打ち合せ、取引相手の意向の確認等々の仕事である。このような仕事にあっては先ほどの敷物のレースのような物が出来上らないことは明らかである。この下準備の仕事が最終的には下車後の会場における取引の結着に見るとしても、その結着は書類上の捺印かサインぐらいが精々で、眼の前に建造物が出来たり、物量の移動が起ったりするわけではない。取引が締結すれば一連の書類という形も出来ようが、3時間の乗車中の下準備に至ってはもっと形になりにくく、ほとんど形を成さないと言ってよい。しかし、下準備が首尾よく取引を行なうことにとっての前段階である以上不可欠な仕事であることは間違いない。このような仕事は最近では情報の処理、加工、伝達で説明されるのが普通である。それは従来の物質とエネルギーに情報を加えて世界を統一的に把握しようとする、サイバネテ

ウィックスの創始者ウィナーの見解によろう。

しかし、日本語のコト（事，言）の概念は既に、物としての形姿をとりにくい現象を本質的に把握していないであろうか。事務員，理事，知事，検事等々の示す語は明らかにこの辺の事情をうかがわせるに十分である。知的仕事でなく，もっと肉体的仕事に近い仕事を探せば，道路工事，配管工事，建設工事等の〈仕事〉の中に見出すことが出来よう。これらの工事のものでは，工事結果がはっきりした物の形姿をとるものとそうでないもののがあって多種多様である。われわれは仕事の結実成果の形姿に眼を奪われてはならない。〈工事〉にあっても人の作業工程や作業過程に視点が置かれているのである。また，労働の軽重が問題なのでなく，ワザを為すこと，あるいは推移的なワザの形象が問題なのである。これが時間の〈コト〉性なのである。

ここで仕事と時間とが一枚のコインの表裏で不即不離の關係にあるのではないかという考えが浮んでも来る。「この仕事には時間が要る」とか、「この仕事は時間がかかる」とか、「この仕事は時間を喰う」とか、「この仕事に時間が喰われる」とかと言う時，時間と仕事は一心同体であることは明らかである。時間がなくては仕事は出来ないし，仕事は一瞬の生業ではない。仕事はある時点からある時点までの間隔において成就される。婦人の手芸も，商社員の準備も乗車時間内で成立する。婦人や商社員は自分の時間で自分の仕事をしている。自分の時間と自分の仕事とは一心同体で不即不離である。

しかし，婦人の手芸は，彼女が汽車に運ばれていなければ成立しないと云った代物ではなく，彼女は1冊の本を読んでいても窓外の風物を見てもZ駅には着ける。ところがZ駅下車後ただちにその駅の近くの会場で商取引をする商社員は，自ら汽車によってZ駅に運ばれないことにはその取引が出来ない性質のものである。別言すれば，下準備の仕事に一契機として自らのZ駅到着が含まれているのである。乗車も仕事の中に入っている。彼がZ駅に予定通りに到着していないと取引が行なわれぬからである。しかし，Z駅に着くことを実現してくれるのは自分の仕事ではなく運転手の仕事であるから，着くことを

仕事の主たる目的に樹てても仕方がない。従って着くことは彼の当面の下準備の事柄から背景に退き表面に浮び上ってこない。これが浮び上ってくる時は、汽車が事故などで遅延を余儀なくされた時で、その時は約束通りの予定時刻に会場に着けるのかやきもきして苛立ちを覚える。何故ならばZ駅に着くという下準備の一契機が危ぶまれ取引そのものが御破算になりかねないからである。しかし汽車が順調に運転されているなら、Z駅到着のことは彼の念頭から遠ざかっていて、汽車の到着間際に意識されるにすぎない。こう言ってよかろう。商社員の下準備の仕事は乗車時間から全くは遊離してはず、また続く仕事全体の一位相となっている。否、こう言った方が適切な表現であろう。婦人の手芸の時間は、汽車の運行の時間によっては本質的に基礎付けを受けていないのに反し、商社員の仕事の時間は汽車の運行の時間の中に一本根をはやしている。と言っても絵巻の時間が汽車の走行と同期していたように、商社員の仕事の時間は同期したり同調したりはしていない。汽車の運行の時間が商社員の仕事の時間を完全に構成したり組み立てたりしているわけではない。例えば汽車のスピードが途中で速くなれば、彼の仕事ぶりも速くなることはありえない。汽車の運行の3時間と彼の下準備の3時間とは同一構造のもでもないし同一次元におけるものでもない。全く異質なのである。

以下のイメージを持ってもあながち大過とはなるまい。大きな銀のコイン、中ぐらいのニッケルのコイン、小さい銅のコイン——これらはそれぞれ^〇_〇自分の表裏を持っている。それら3枚のコインが積み重ねられた場合一つの階梯構造が出来、基づけるものと基づけられるものとの関係が生じる。コインはそれとしては表と裏との同体であるが、最上層のコインの表と最下層のコインの裏とは同体ではない。そして重なりが遊離的な場合もあるし、密着して吸引的な場合もあるし、ずれずに積み重なる場合もあるし、ずれる場合もある。

乗客を運ぶ時間をつくる運転手の時間は彼の汽車の運行の3時間である。これが彼の仕事の時間である。手芸をする婦人の乗車時間は運転手の仕事の時間と同期はしていても、彼女が編物をする仕事の時間はこの乗車時間とは異質で

ある。特に手芸の仕事は少しも汽車の運行時間と同期していない。もし人がこの婦人の手芸の時間も3時間であると主張するなら、それは第三者の時計の計測時間で外から眺めているわけである。時計の無表情な同質的時間構造からすれば、A駅からZ駅までの乗客の時間は、すべて3時間の乗車時間ということになる。しかしこれでは各々の乗客の持つ^{自分}の時間の構造は捉えられない。各々の乗客の生きられる時間は運搬する時間たる乗車時間には還元出来ない。それは数枚重なったコインの最上表面と隠れて見えない下層のコインの表面とを同じだとする論法である。上層は下層に支えられ基づけられているからと言って下層と構造が同じであるという理屈は出てこない。手芸や下準備に熱中すれば、普通、本当に自分が汽車に乗っているのか怪しくなるほど乗車という事柄は背景に退いてその面貌を直接に示さないのである。それはエスカレータや階段で二階に昇ってしまえば、足下に一階があることが意識に昇ってこず、ただひたすら床の上に居ることしか気づいていないと同様である。住み慣れた場合、自分の住居が高層建築物の十階にあることすら定かでなくなることがある。

乗車中、お喋りや勝負事に無我夢中になった時、何か別の次元の世界に住まっているような気がするものである。志向性の強い事柄に夢中になった場合、特にこの感じが強い。

（口） お喋り事

見知らぬ人と乗り合せ、話しに花を咲かせている内に、いつの間にかZ駅に着いて、別れ際「楽しい一時を過ひとときごさせていただきました」「こちらこそ」とお礼を言い合って別れることがよくある。この「楽しい一時」という言い方は大変意味深長な表現である。問題はA—Z間の会話が兩人にとってどうして「楽しい一時」となるのか。話しのやりとりがなかったらおそらく兩人とも3時間の乗車に退屈を感じ所在なかったに違いない。いずれともなく持ち出した話題が意外な展開を見せ、話しがはずんでとめどなく続き、和気藹々のお喋りがZ駅まで支配したと言える。

世人はこのような状況にあって〈時を忘れた〉と言うが、その〈時〉とは乗車の3時間のことでお喋りの時間ではない。これまで用いた用語を用いるなら、下層の時間が忘れられたのであるか、あるいは下層の時間が上層のお喋りの時間によってほぼ蔽い尽されてその顔を出すすきまがなかったかである。上層の会話の織物が密に織り出されていてそこに顔を出すすきまを与えていないのである。「楽しい一時」と言うのにはそれなりの事由があるように思える。「一時」^{ひととき}とは短い時間の意であるが、二様の意にとれそうである。ただだらしなつまらない話しのやりとりの連続であったなら、決して「一時」とは言わないだろう。話しの流れに何か起伏があり、めりはりがきき、両人をいつまでも話題につなぎとめておく律動性や変化性や軽快さが漲っていたため、別言すればのびきったゴム紐ではなく、ぴんと張りつめていたがために、話しの初めから話しの終りまでの会話の成行きが圧縮され密度を高めて、^{ひととき}一時のような形になったと言えよう。もう一つは両人が一緒になって共感する有情の一つの時を創り出しそれを共有したという意にとれよう。それは両人が共に和して会話に諧和の流れをつくり、乗車という非常に殺風景な時間の上に人情味溢れる感情的なえも言われぬ惹き合う時間をつくったと言えよう。「楽しい」というのは、その会話の流れの持つ価値特性にたいする両人の情動的、情緒的応答の享受様式を表現しているが、ここで深入りするの時期尚早である。むしろお喋りの流れの構造を仔細に考察しておく方が当面の問題である。

会話やお喋りには小説のように何度か手が加えられ推敲して出来た構成された仕組みはない。替る替る話し手と聞き手を変えて言葉と表情で織りあげて行く織物に似ている。相対面し、相会する場の中で話を交わすことによって生じる意味的な事柄であり、文字通り、会話とは話と話が相まみえ、人と人との間において成り立つ^{コト}言的な事柄である。発話と発話との継起順序は初めから決ってはいないから、両人が発話と発話をつなぎ絡めて脈絡をつくりながら話し全体を前方へ前方へと繰り延べて行かなければならない。相手が見知らぬ者同士なのだから会話の切り出しは極めて難しい。しかし慣れ親しんだ長らくつき合

った間柄と違って意外な話題が飛びだし花が咲くかもしれない。話しかけの最初の言葉に対して相手がどう受けとめて反応を示すかは皆目予想がつかない。相手の表情と身なりを窺取して快く受け応えてくれるものと思って切り出しても、そっけない一言で出鼻をへし折られてしまうこともある。話しの切り出しは定まらぬ未来への賭事に似た一つの冒険である。この人に話しかけて良かったということが本当に分るのは実はお喋りが終って別れ際とも言えるほどの時で、それまでは何時どこで頓挫し挫折するかは皆目見当がつけにくい。二言目に冷淡な返答が突けんとんに返ってくるなら沈黙は下車までその場を支配し、気まずい想いがその後の空白を全部埋めかねない。しかし丁と出るか半と出るかはサイコロを振り出して見ないことには分らないし、そうでもないことには会話の緒をつかむことは出来ない。もし相手が快く受け応えてくれれば話しの今後の成行きに緒にとりつくことが出来る。さらにうまく取り交わしが続けば展望も垣間見えてくるし、興もの。しかしいつつまずき中断を余儀なくされるか先々まで見通し切れない。相手の気分を損って口をつぐめばそれで御破算ともなりかねない。予断は許されないわけではないが、話しを先に進めて行くなら油断は禁物であり、言葉を選び話題にそって話しを続けなければならない。しかし妙なもので、一旦軌道に乗るともう安々と身勝手に言の成行きから手を引くわけにも行かなくなる代物でもある。兩人そろってお喋りという機を織っている以上、得手勝手には手は引けなくなる成行きでもある。

ところでまがりなりにも動き出した会話はどんな進行構造と方向を持つのか。その相和する話しの力学とでも言うべきものは何か。

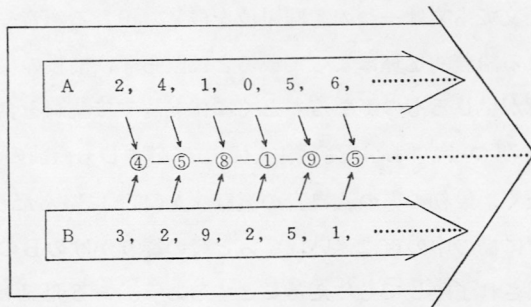
兩人同士は向い合いで座席に坐って話し合っている。兩人を包んでいるわずかの空間は固有な磁力の働く場であって、単なる空間ではない。他の空間から透明なエア・カーテンで仕切られている独特の空間場である。それは窓外に流れる風物空間でもないし、兩人の背後に坐る他の乗客を包む空間でもない。この場には二つの自我極があり微妙に惹き合う力線で満ちている。兩人の話しと表情と仕種が放散し溢れる。この場の境界は発話される言葉の響きの及ぶ範囲

ではなく、それが相手によってまともに受けとめられる意味の射程である。この場の外にいる第三者にとっては、この場から漏れてくる言葉の響きは音韻や意味の響きではなく、意味のとぎれた脈絡のない単なる音響にすぎない。例えば、途中から乗り込んで来て、この場に割り込もうとしてもうまく行かないことは誰も経験していよう。それは既にその場に流れている話題とその脈絡が皆目つかめないことによるわけだが、特に兩人にとって会話が盛り上がっている時などは、その割り込みを嫌い仲間入りをこぼむ素振りをさえ示すものである。またそのそばで若干きき耳を立てて聞いていても、当分の間、その話しのこれまでの筋道が分からなく、なかなかその場に入りこめない。割り込みにくいのは、その場に一つの固有の会話の内実が満ちていて、しかも他の空間と仕切る仕切りが透明とは言え厳然と立てられているからである。割り込めないこと自体がこの仕切りの存在を物語っていよう。座敷とか応接間とか談話室とかが、特有の仕方では切られた場であることは周知のことであるが、しかし話者がいなければ単なる仕切られた空間であって場とはならない。少なくとも二つの話者の自我極が存在し、話しが交わされないことには場は場として生きていないのである。場とは相向い合う間である。そして対話の〈場面〉とはまさしく両者が対〈面〉する〈場〉なのである。独りでいくら喋っても独話でしかないし、また遠方の相手と電話を介して話しても場は成立しない。互いに相手を目前にしている時に両自我極から発話文が生まましく飛び交い、眼差しが触れ合い、笑いが溢れ、顔に色どりが現われ、意味ある仕種がただよう。このことによって空間は場となる。会話はまさしく相会する話し、話しの和であって、電話による無表情な伝達ではないし、一言も発しない単なるにらみ合いの見合いでもない。

場にあっては、何気ない一言もその場の全体を領し、相手の自我極をゆさぶりもするし、場合によっては固く閉ざした胸襟をひらかせるきっかけとなって親和感を生みだし、逆にまたちょっとした粗野な発言が相手の気にさわり沈黙を喚び起すことにもなる。しかしうちとけた場が出来ておれば忌憚のない意見

も吐くことが出来る。気まずい思いを修復することも可能である。場の中にある自我極は、場の雰囲気微妙に感応し、共鳴したり反発したり、仲直りしたり、極の扉を固く閉ざしたり、明るく開いたりする。それは単に相手から発せられる言葉の響きに直接反響するのではなく、場の中に響き渡っている有情的非情的響きにこだましたり、人情の機微に反照したりするのである。この場の雰囲気の一つは両人の表情や仕種で、そこはかたない微小な響きとなって両自我極をすっぽり包むことすらある。それを感じ取っての次の発話ともなる。眼差しも言葉以上にものを言う場合もあり、また間合いも言葉以上の語りとなる場合もあり、言葉だけが会話の諧和を成すのではない。言葉は純粋な語義の意味として自我極から放射されないし受容もされない。そこには同じ自我極から出るそこはかたない情緒が染みつき、場合によっては強い情動をあからさまに運ぶことすらある。言葉と情緒の関係は今の論題ではないので深追いはやめておこう。むしろ会話の場の中で進展する会話の過程の構造に視点を移す必要がある。

次のような図式でその骨組を図示してみたい。A, Bは自我極であり、Aの2, 4の数字は発話の内実であり、単なる発話文の文法上の文ではなく、表情や情緒を伴っている発話文である。頷きや相づちも一つの発話である。数字の大小は発話の内実や推進力と見てよい。Aの発話(2)に対して相手方Bがそれに応答(3)した時、会話の和は④となる。それはいわばAとBとの平行四辺形的合力と言ってよかろう。Aの次の発話(4)はBの発話(3)に直接反射したり



共鳴したりするのではなく和の④を基礎にしてなされる。Bも同じくAの発話(4)に直接応答するのではなく和の④の上に立って次の発話(2)を行なうと見てよい。すると今度は会話の和⑤が成立する、云々。これは発話過程を極めて単純化したもので、普通、同時に発話されたり、返答が頷きや眼差しの肯定や否定であったりする場合はいくらでもある。むしろ会話にあってはこれが常道である。このような仕種も発話と見做したい。会話の進行は両自我極にとっては一見、 $\boxed{A(2)} \rightarrow \boxed{B(3)} \rightarrow \boxed{A(4)} \rightarrow \boxed{B(2)} \rightarrow \boxed{A(1)} \cdots \cdots$ のように見える。それは恰も数珠にも比せられ、一つの発話は糸の通った一つの数珠玉と言えよう。しかし会話はこの数珠玉の継起順序ではなく、それらから超越した一段上の境位 $\textcircled{4} \rightarrow \textcircled{5} \rightarrow \textcircled{8} \rightarrow \textcircled{1} \rightarrow \textcircled{9} \rightarrow \textcircled{5} \cdots \cdots$ なのである。一見ここにもまた数珠の様相がうかがえるが、実は $\left[\left[\left(\textcircled{4} \rightarrow \textcircled{5} \right) \rightarrow \textcircled{8} \right] \rightarrow \textcircled{1} \right] \rightarrow \textcircled{9} \cdots \cdots$ と次々と入れ子構造的に括弧でくくっていった方がもっと適切な表示かもしれない。あるいは伸延の膨張の様相と言ってもよい。会話の過程も手芸のレース編みに喩えられなくはないが、しかしいくつかの相異点を指摘しないと危い陥穽にはまって歪曲しかねない。確かに線条的な継起順序をもつ数珠玉(単一な発話や複数の発話)は直前の数珠玉と直後のそれに接続し、また先行のいくつかの玉に絡みつき後続のそれによって絡みつかれて脈絡(文脈)となるが、それは手芸のレースの構造化の比ではない。発話たる数珠玉は、先述したように単なる文法上の発話文ではなく話者の表情、表出や場の雰囲気染ったものであること、それに加えて、発話はまた文としての文法上の機能をも果しているのである。どんな短い一語文でも文は一つの意味単位を成し、単なる語音や音声につきなない。文意は単なる語義的足算によって成るとは限らず、前後の文との連関によって初めて文意が生じるものがある。とくに代名詞や接続詞を含む文は、前後の文に錯綜と絡みつく。例えば発話 $\boxed{A(5)}$ は必ずしも直前の $\boxed{B(2)}$ に絡みつくのではなく、最初の方のA自身の発話 $\boxed{A(4)}$ に絡んだり、あるいは何ものにも絡まずに場の中の宙に迷い、ずっと後の終りかけのBの発話によってその意が救い出され了解してもらえらることすらある。ある発話は相手の誤解

を解くものであったり, 聞き返しであったり, 相手の発話を後になって肯定したり否定したり, あるいは自己の弁解や細説であったり, 自分の趣意や意向の説明であったり, 文意は決してスマートな数珠のような線条性を示さない。先行の発話が相手方によって把持されていそうもなければ反復されるし, 相手の胸襟を開かせるためにカマをかけたりなどの手をつかって相手の心を窺うこともある。場合によってはある発話がすぎ去った発話に絡みつきすぎてどぎつさを示し, 会話の成行き障害となったり, あるいは打ち切りの予告となったりする。手芸の糸は一続きの連続性を示しているが, 発話の数珠玉は離散的で, これまでの会話の全体の文脈の中でしか活かないものもある。発話文の語義も前後の色々な語義と絡みつき, 一つの発話が専らある語義解釈となることすらある。ある発話文のある語義がその前後では完全に顕在化せず, ずっと後になって顕在化し, 会話の流れを急にスムーズにすることもある。表情と密着した時にのみ一語義が鮮明な意味を示す場合もある。今ここでは発話, 発話文の連結, その機能, 文意, 語義等について述べる処ではないのでこれ以上の深入りは避けよう。後に, 諸々の文の継起順序が繰りだす虚構の時間で仔細に述べる機会を持つので, それまで差し控えておこう。ここで文脈ではなくて, 会話全体の進行の構造について別の比喻をかりて述べておきたい。

海に浮ぶ一艘の舟は会話の舟である。左右に坐ってそれぞれ櫂を漕ぐ人は会話の兩人である。Aが二かきBが三かき漕げば平行四辺形的合力で進むことになる。舟の進みが会話の進みである。その方向は合力的方向線である。Aの次の漕ぎはこの進みの方向でしか出来ないし, Bもまたそうである。片方が一方的に力を出し続ければ舟の進行方向は偏り, 旋回などして舟は前方に進まない。会話を前方に進めるには兩人が同程度の力を出すか, 或る点で折れ合うか, 余計漕いで偏りをただすしかない。一旦舟が動き出せば, 多少兩人が力を緩めても惰性で前進するものである。惰性がつけば舵のとり方は容易となり, もう片方だけの気ままでは櫂を漕ぐわけにいかなくなる。普通, 乗りかかった舟からはもう下りられなくなる。また兩人が同じ力でぐんぐん漕げば舟には

スピードがつくし、両人が力を抜けば波の間にただようことにもなる。舟の進み具合は両人の漕ぎ方次第なのである。

漕ぎ手たる両人は確かに舟に乗って櫂を漕ぐのだから舟を進めるのは両人であるが、しかし進むのは舟であって、両人はその舟に運ばれて進むのである。両人は舟を進める人ではあっても舟そのものではない。舟はいわば会話の場である。この場は両人が漕ぐことによって前方へ進むのである。両人が場の中にある点で、両人と舟はいわば一心同体的である。この意は舟の進みと両人の進みが不即不離の関係にあるという意である。しかし、反面、舟と両人は一心同体的でない。この意は両人が漕ぐ活動をするわけで、舟自身が櫂を漕ぐわけではないという意である。活動の主体は両人であって舟ではない。漕ぎ手が舟を進め、まさに進めることによって漕ぎ手もそれによって進むという構造は、二人漕ぎの自転車の二人乗りとの関係に似ている。しかし二人漕ぎの自転車の場合は先頭の乗り手が方向を決めるが、舟の場合はそういうわけには行かない。舟の進む方向は両人の漕ぎ方次第なのである。それは平行四辺形的合力線である。それは確かに二つの分力に分解は出来るが、いずれの分力にも還元することは出来ない。合力線の方法はそれぞれの分力の方法とも違うし、力の大きさも違う。方向や大きさを持つ点では合力も分力も同じである。この同じことから両者を同一視することは、石とセメントから出来ているコンクリートを石と同一視したり、セメントと同一視したりするのと同じ誤りを犯すことになる。また分力と合力との間に部分と全体の算術的關係をおくのも、コンクリートを石とセメントの単なる集合とするのと同じ誤りを犯すことになる。合力は分力の算術的足算ではないし、コンクリートは膠着力を持つセメントが石と石との間にはさまっていなければならない。だから $A(2) \rightarrow B(3) \rightarrow A(4) \rightarrow B(2) \dots\dots$ の数珠玉の足算では会話の進みや方向は産まれてこないのである。相和して $\left[\left\{ (4 \rightarrow 5) \rightarrow 8 \right\} \rightarrow 1 \right] \rightarrow 9 \dots\dots$ となる会話の進みと方向は、数珠玉(発話)の継起からは超越している合力的境位の一段上の在り方をしていいる。これを〈意味〉の意を広く解して〈意味〉の織物と言うならそれでもか

まわらないが，単なる文法上の発話文の織物ではないことに注意を促しておきたい。もし文法上の発話文の織物なら，漕ぎ手は同じ一つの舟という場に乗っている必要はなく，電話でのやりとりでも可能なのである。舟という同じ対面場の中においてしか合力は生きていない，否，この場の中でしか合力は産まれない。ならば会話の進みの構造やその方向は数珠玉の継起や継起的な数珠玉には還元すべくもない別の境位の有り様を示しているのである。それは両人の自我極からも，両極がつくる場からも超越した独特な構造を持つものである。

会話の合力線は，厳密に言えば少しも幾何学の平行四辺形的合力線ではない。単純な直線でないことは $\left[\left\{ \left((4 \rightarrow 5) \rightarrow 8 \right) \rightarrow 1 \right\} \rightarrow 9 \right] \cdots \rightarrow$ の伸延的膨張的合力によっても了解出来ようが，更にここで山脈の比喩を加えよう。④，⑤，⑧，①，⑨，の数量は山並みの起伏であり，高台もあれば，なだらかな山もあれば，峻険な山岳もあり，谷もある。これは垂直的高低である。他方 ④ → ⑤ → ⑧ → ① → ⑨ → …… の展開リズムがあり，高台からなだらかな山へ，そして峻しい山岳へ，と思うと次は深い谷間で，登る人にとっては楽な歩調から登り坂に入り，それから胸つき八丁となって息せき切る。登りつめで山頂に立てば展望もきく，急テンポで沢を下れば森へと入る。一口で言えば山脈の脈は脈搏のような単調な周期性ではなく急なテンポの時相，なだらかな時相，クライマックスの時相，劇的な終時相等の展相なのである。この展相はAの発話の系列でもBの発話の系列でもないし，またA，B両人の発話の継起系列でもないし，その持つテンポやリズムでもない。またA，B両者の心の緊張や不均衡の連続や継起ではない。それらから超越したテンポやリズムや律動性であり，別言すればオーケストラ全体の交響であって，個々の楽器のそれらではない。相手がいくら速く喋りまくったからとて，会話のテンポが速くなるものではないし，逆にゆっくり話したからとて全然進展が見られないわけではない。むしろ手頃の沈黙や眼差しだけの頷きの方が喋る言葉よりも速いテンポをつくるし，調べも変えられるし，場の雰囲気の一つの情を添え，ぎこちなさを取り除き，引き合いを強め，和気藹々のものにする。会話にあっては発話文と発話文のご

つごつしたやりとりよりか、またふとした語音の響きによって反発を招く語調よりか、それとない仕種や頷きが、発話に重きを置き情趣を添え、意味の趣きを深めることが多い。儀礼ばった他人行儀の言葉遣いは会話全体の成行きに微妙な影を落して行き先を暗くするし、逆に心を割った気を許した言い廻しが行き先に明るい色どりを添えテンポを速める。よく経験することだが、夕方の一家団樂の^{たけなわ}關の時に電燈が消えて暗闇となった時、雰囲気は致命的な打撃をうける。それはその場に言葉とならぬ表情や情趣や微妙な仕種が充満していた証左である。闇が会話の場をかき消し色彩を抜き取ってしまうのである。

今、仮にA駅からZ駅までのこのお喋りを3時間録音したとして、それを兩人が後で聴いたとしよう。兩人はまことに奇妙なものを聴く思いがする。自分がその時どうしてそんなことを話しているのかの脈絡もつかめなくなる。それは録音は音声しか録音せず、その場その場のそこはかかない雰囲気を録音しえないからである。3時間の録音は、一見して

A(2)

 →

B(3)

 →

A(4)

 →

B(3)

 …… の継起的な線条的発話順序を収録しているように見えるが、実はそれもしていないのである。頷き、眼差し、仕種、身振りはすべて録音外にある。またこれを録画しても、あるものは救い出されるが、場の生みの雰囲気は録画されないのである。会話の和は録音や録画の継起順序とは別の境位のものであって、それらの構造に還元出来る代物ではない別の在り方をしている。

会話の進行の内的構造を考察する際、単に発話文の文法上の構造に限ったり、ひたすら文としての文、文意と文意のつながりとしての文脈だけに限ったりすれば、事柄の本質を大きく歪めてしまうであろう。それは有情の時を無情の時に変えるに等しい。座席で相対するのは言葉と言葉ではなく、二つの生身の身体丸ごとである。自我極は純粹自我、純粹意識、純粹思考に尽きるものでなく、情動と情緒の核でもある全人格なのである。後に虚構の時間で説明するように、文学作品（小説、読む戯曲など）の会話は、発話文と話者の状況説明文でしか表現されず、当事者の生きたこまかい表情や仕種の情景や場景は読者の想像に半ば以上まかされている。発話文に染みついている微妙な情緒は説明文で

は描写しきれないし、また同時に表現出来ない。どの文もいくばかりかの時間的経過を必要とするからである。線条的な諸々の文によって言的事態はつくられるが、それは生身の身体が座席でつくる言的で且つ人と人との実的な事柄の場ではない。文学作品にあってつくられる事態は純粋に言的であって、車中のそれは言的につきず事的でもある。対談や会話は当事者がその場の中に居合わせて初めて進められるもので、そこには他者や伝達器機の第三者の媒介を必要としていない。よく対談物を読んでつまらないと読者に感じられるのは、臨場感が伝ってこないし、言葉だけがやたらに響くことによる。対談者の写真を掲げたり、（笑い）と書き入れられても何か冷ややかで笑い声が伝ってこない。以上の意味でA駅からZ駅までなされるお喋り事や会話は、文学作品のような純然たる言的事態と考えるわけには行かない。確かに言は主要な織り糸となっているがそれのみで織り上げられてはいない。何よりもまず二つの自我極のある〈場〉ほど事的なものはなく、振舞い、仕種、表情がこの場に溢れていて織り糸ともなっている。会話は文法的な文の、あるいは小説の中の文の織りなす色彩に乏しい織物でなく、表情や仕種が、心や情緒が織り込まれている色鮮やかな錦絵である。本居宣長が「……言と事と心と、そのさま大抵相かなひて、似たる物にて、……」と述べている洞察は、この会話の和においても活きていると見ても大過ない。言と事と心は微妙に織り合って一つの錦絵をつくっている。会話の和を、当事者の言葉だけの和にも、両自我極の事の場合にも、両人の心理的状态の和にも還元されるものではない。いずれをも超越している融合的な和である。言だけでも、事だけでも、心だけでもつくりえない独特な境位の和である。

話し言葉は、艶のある言葉であるばかりでなく、話し手、聞き手にとって少しも重みを感じさせない軽ろやかな透明な響きのものであることに注目しなければならない。普通、話し手が言葉を選ぶことはあっても、話し言葉に重みを感じとる人はいない。時たま罵声やどなり声はあっても物のような物量の重量は感じられない。第一われわれは母国語を常に身につけていて、それを物とし

て所有しているなどの意識は寸毫もない。ましてや文法規則を意識的に修得した後に母国語を使用しているなどの人は誰一人いない。自由に駆使されているのである。そうであればこそ、言葉は空気のようなもので物としての抵抗感を与えはしない。この点、活字を読む読書活動と大きく違っている。話し言葉の音声は響き渡るのであって〈……を聞く〉という対象的意識は強く感じられない。響いてくるのである。活字の場合は視覚的対象として〈……を見る〉という対象性は強く、対象と視覚者との間には距離が感じられる。話し言葉に距離が感じられる場合は、むしろ意味了解の出来ない場合の距離であって、意味を担っている語や文の物的距離感ではない。活字は物として持続する。書物は物として外的に破壊されるまで持続する。話し言葉は録音でもされない限り、その場に長いこと持続しないで消えて行く。この点で音楽演奏と変らない。この意味で会話はレース編みの比ではない。お喋りには演奏楽譜はない、編み出されたレースの敷物もない、活字の持続性もない、これほど移ろい易いものはない。喋ったことは風のように流れ去る、また風のように軽やかである。しかしこのお喋りはA駅からZ駅まで持続したのであって、喋る片端から時々刻々と流れ去ったわけではない。ある話題が、ある話しの筋がお喋りの中に一本通っているのである。A駅からZ駅まで続いたお喋りは一つの推移的なもの、一つの過程、一つの時間的作品なのである。作品としては一つの芸術作品（例えば秀でた漫才の如き）のような技を要するものではないにしても一つの事の成果、つまり仕業の作品である。お喋りの成果は決してレースの敷物のような物的形態をとらない音楽の如き作品であるが、決して音の交響ではなく言葉が主たる織り糸となっている言的^{コト}な作品である。と言って何度も指摘して来たように文学作品の純然たる言的^{コト}事態ではない。言的^{コト}事と事的^{コト}仕業の織り合いの、心の触れ合いの伸延的な軽やかな推移事態である。流動的な自由な変容を蒙る可塑的なものと言ってもよい。お喋りは誰でもが創れる時間的作品である。創り出しながら、場の中で自由に変調をもたらし、方向の舵を変え、そうすることによって当事者が楽しみ生きる時間作品なのである。当事者が共に創り出した

からそこで生きる時間なのである。本当にお喋りに無我夢中になればZ駅の下車までチラッと自分の時計を見ることもないほどのものとなり、車内の情景も窓外の風物の流過も周辺に追いやられ、しばしば一瞬顔を出すことはあってもお喋り時間の主人公となって、そこに注意が向けられることはない。そしてZ駅に到着しなければならないという事態は背景にしりぞき浮き上らず意識の片隅に追いやられる。だからここの冒頭で示したように、「楽しい一時」という時の「一時」は、乗車の3時間の〈一時〉ではなく、むしろ当事者が一緒になって創った、圧縮されて密度の高まった有情の時間なのである。第三者の眼からすれば、A-Z間の会話は、時計で計測される3時間の会話であるが、当事者にとっては、丁度夢の中の時間のような短い一時なのである。無我〈夢中〉のお喋りとは、まことに言いえて絶妙、夢の中にあっては夢の心像以外の何もも見えないし、その梁間は短く、外から時計で計測しようもない。〈夢中〉のお喋りは、ふり返って見れば、ひと時と言うしかほかにないのである。

注意すべきはこの時間は外から与えられる時間を体験する時間ではなく、当事者兩人が共働して創りながらそれをその場に臨んで享受する生きる時間である。この時間の実的な再現は不可能である。当事者兩人は後に想起したり回想し得ても、この「一時」を実的に反復することは全く出来ない。Z駅に着いて下車して「楽しい一時を過させていただきました」「こちらこそ」と兩人が別れの言葉を交わしたのを最後に、もはや生きられた時間となり、もう同じことは実的に生きられないのである。つまり過去へと沈下して、レースの敷物のような物の形態をとどめないのである。ひと時は永遠に過ぎてしまう。楽しいひと時は過ぎ去ってしまうひと時なのである。後に過去から、記憶から呼び戻されて想起されて、〈生きられ〉ても、それは実的に生きられることではなく、想念的に生きられる時間性にすぎない。この点で次の観想の時間にも止目しなければなるまい。

—つづく—